Well-being に対する加齢と教育歴の交差的影響

MIDJA データによる交差的分析

唐澤真弓¹・〇杉野珠理²

(¹東京女子大学現代教養学部・²東京女子大学大学院人間科学研究科)

キーワード：エイジング, 教育歴, ウェルビーイング

Understanding the Interplay of Age and Education on Psychological Well-Being

Mayumi KARASAWA¹, Juri SUGINO^{2, #}

(¹Tokyo Woman's Christian University., ²Graduate School of Tokyo Woman's Christian University.)

Key Words: Ageing, Positivity trends, Well-being

目 的

長寿とともに人は生きる意味を考え、幸福について関心が高まってきている。アメリカにおける幸福感とエイジング研究では、高齢者は若い世代と比べて、人生満足感やモラルが衰退していないことが示された (Lawton, 1975)。さらに肯定的および否定的感情は加齢に伴い上昇することが明らかにされてきている (Charles, Reynolds, & Gatz, 2001; Mroczek & Kolarz, 1998)。しかし、幸福感の測度によっては加齢による幸福感の上昇がいつでももたらされるわけではない。幸福主義的幸福感 (Ryan & Deci, 2001) においては、ポジティブ・ネガティブ双方向の加齢による変化が見いだされてきている。他者との関係性や環境の統制、自己受容といった幸福感は上昇するのに対し、人生の目的や自己の成長といった幸福感は減少することがみられているのである (Keyes, Shmotkin, & Ryff, 2002)。これらの結果は、ライフステージにおける個々の発達課題といった社会的位置付けなどが幸福感に影響を与える可能性を示唆するものである。しかしながら、幸福感とエイジングの研究において、社会的要因を同時に考慮して検討した研究はあまりみられない。例えば、幸福感には教育歴の差が影響することが示されてきているが、こうした差は加齢を通して持続するのか、また縮小または拡大するのかといったエイジングと教育歴との関連は統合的に分析されてくることは少ない。

本稿では、幸福感に対する教育歴加齢の交差的影響に着目し、分析することを目的とする。

方 法

分析対象者：MIDJA 研究で対象となった東京 21 区の男女計 1027 名 (Male:505, Female:522)。

分析指標：「心理的幸福感」尺度 (Ryff, 1989)：「Self Acceptance 自己受容」, 「他者との肯定的関係 Positive Relationship」, 「自律 Autonomy」, 「環境のコントロール Environmental Mastery」, 「人生の目的 Purpose in Life」, 「自己成長 Personal Growth」の各 3 項目、計 18 項目。回答形式は、「全く同意しない=1」から「全く同意する=7」の 7 件法。「快樂主義的幸福感」：[人生の満足感] 尺度

(Pavot & Diener, 1993) の 5 項目。回答形式は、「全く同意しない=1」から「全く同意する=10」の 10 件法。「肯定的感情」と「否定的感情」 (Mroczek & Kolarz, 1998) の各 6 項目、計 12 項目、回答形式は、「全く感じない=1」から「いつも感じる=5」の 5 件法。年齢は 30 代, 40 代, 50 代, 60 代, 70 代の 5 つの群に分けて分析をおこなった。また教育歴は、高校卒業までの 12 年間, 専門学校から短大までの 13-15 年間, 大学卒業以上 16 年間以上の 3 つの群に分類した。

結果と考察

各 well-being 変数に対して、性別 (2) X 年齢群 (5) X 教育歴 (3) の分散分析を行った。快樂主義的幸福感：ネガティブ感情においては教育歴の影響がみられなかった。人生の満足感と肯定的感情においては年齢と教育歴の交互作用がみだされた ($A11 p < .01$)。幸福主義的幸福感：自律性を除くすべての尺度で年齢の主効果 ($A11 p < .05$) がみだされた (Fig1)。また、自己受容と環境の統制においては年齢と教育歴の交互作用がみだされた ($A11 p < .05$)。この結果はアメリカの MIDUS 研究において幸福主義的幸福感で教育歴の強い影響がみられていることと一致するが、年齢にともなう教育歴の影響の変化や肯定的感情における教育歴の効果については一致しない。こうした日米差を含め、幸福感とエイジング、教育歴との交差的影響について、討論する。

Fig 1:PWB and Educational Attainment

引用文献

Keyes, C.L.M., Shmotkin, C., & Ryff, C.D. (2002). Optimizing well-being: The empirical encounter of two traditions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 1007-1022.